

家畜衛生週報

ANIMAL HYGIENE WEEKLY

No.3890 農林水産省消費・安全局 畜水産安全管理課、動物衛生課 2026. 2. 9

- ・千葉県における高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜の確認（国内18例目）及び「農林水産省鳥インフルエンザ防疫対策本部」の持ち回り開催について 41
- ・動物用医薬品副作用報告（令和7年12月） 42
- ・家畜衛生レポート（岐阜県） 46

☆千葉県における高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜の確認（国内18例目）及び「農林水産省鳥インフルエンザ防疫対策本部」の持ち回り開催について

（令和8年1月27日付けプレスリリース）

本日、千葉県旭市の家きん農場において、家畜伝染病である高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜が確認（今シーズン国内18例目）されました。

これを受け、農林水産省は、「農林水産省鳥インフルエンザ防疫対策本部」を開催し、今後の対応方針について確認します。

当該農場は、農家から通報があった時点から飼養家きん等の移動を自粛しています。

現場での取材は、本病のまん延を引き起こすおそれがあること、農家の方のプライバシーを侵害しかねないことから、厳に慎むようご協力をお願いいたします。

1. 農場の概要

所在地：千葉県旭市

飼養状況：約10.8万羽（うずら）

2. 経緯

- (1) 令和8年1月26日（月曜日）、千葉県は、旭市の農場から通報を受けて、農場への立入検査を実施しました。
- (2) 同日、当該家きんについて鳥インフルエンザの簡易検査を実施したところ陽性であることが判明しました。
- (3) 1月27日（火曜日）、当該農場の家きんについて遺伝子検査を実施した結果、高病原性鳥インフルエンザの疑似患畜であることを確認しました。

3. 今後の対応方針

総理指示及び「高病原性鳥インフルエンザ及び低病原性鳥インフルエンザに関する特定家畜伝染病防疫指針」等に基づき、次の措置について万全を期します。

1. 当該農場の飼養家きんの殺処分及び焼埋却、農場から半径3km以内の区域について移動制限区域の設定、半径3kmから10km以内の区域について搬出制限区域の設定等必要な防疫措置を迅速かつ的確に実施。
2. 移動制限区域内の農場について、速やかに発生

- 状況確認検査を実施。
3. 感染拡大防止のため、発生農場周辺の消毒を強化し、主要道路に消毒ポイントを設置。
 4. 政務と千葉県との面会等により、千葉県と緊密な連携を図る。
 5. 必要に応じて、食料・農業・農村政策審議会家畜衛生部会家きん疾病小委員会を開催し、防疫対策に必要な技術的助言を得る。
 6. 感染状況、感染経路等を正確に把握し、的確な防疫方針の検討を行えるようにするため、必要に応じ、農林水産省等の専門家を現地に派遣。
 7. 千葉県の殺処分・焼埋却等の防疫措置を支援するため、民間事業者の活用を促しつつ、必要に応じ、各地の動物検疫所、家畜改良センター等から「緊急支援チーム」を派遣。
 8. 「疫学調査チーム」を派遣。
 9. 全都道府県に対し、改めて注意喚起し、本病の早期発見及び早期通報並びに飼養衛生管理の徹底を指導。
 10. 関係府省庁と十分連携を図りつつ、生産者、消費者、流通業者等への正確な情報の提供に努める。

4. 農林水産省鳥インフルエンザ防疫対策本部

日時：令和8年1月27日（火曜日）（持ち回り開催）

5. その他

- (1) 我が国の現状において、鶏肉や鶏卵等を食べることにより、ヒトが鳥インフルエンザウイルスに感染する可能性はないと考えております。

https://www.fsc.go.jp/sonota/tori/tori_infl_bh7n9.html (外部リンク)

- (2) 現場での取材は、本病のまん延を引き起こすおそれがあること、農家の方のプライバシーを侵害しかねないことから、厳に慎むよう御協力をお願いいたします。

特に、ヘリコプターやドローンを使用しての取材は防疫作業の妨げとなるため、厳に慎むようお願いいたします。

- (3) 今後とも、迅速で正確な情報提供に努めますので、生産者等の関係者や消費者は根拠のない噂などにより混乱することがないよう、御協力をお願いいたします。

☆動物用医薬品副作用報告（令和7年12月）(1/4)
産業動物における動物用医薬品副作用に関する報告
(医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第68条の10)

製品名	バイトリル10%注射液
製造販売業者名	エランコジャパン株式会社
動物種	牛
発現動物数／投与動物数	3 / 3
性	不明
年齢	不明
投与前の健康状態	不良
以前の使用歴	不明
以前使用時の副作用の有無	不明
投与量	不明
投与方法	静脈内注射
投与日	R7.5.3
副作用発現日	R7.5.3
副作用の種類	転倒、痙攣
治療の有無	治療
転帰	回復
担当獣医師による評価	因果関係は不明。
製造販売業者による評価	本剤の牛の肺炎に対する投与経路は皮下注射であり、静脈内注射は効能外使用である。本剤の使用上の注意において「牛への静脈内注射により、軽度で一過性の落ち着きのなさ及び呼吸リズムの不整がみられることがあり、またまれに循環障害によると思われるショック反応を起こすとの報告があるので、本剤を静脈内投与する場合には、被投与動物の状態を十分に把握しながら慎重に投与すること。」と記載されている。 今回、マイコプラズマ肺炎および中耳炎に罹患した牛に対し、一次診療時にペニシリンとカナマイシンが投与され、二次診療時に本剤が静脈内投与された。本剤投与から転倒及び痙攣がみられるまでの時間は不明であったが、一次診療中にはこれらの症状は発現しなかった。一方、発育不良となった要因としては、本剤投与時にみられた症状以外にも一次治療による治療効果も関与している可能性も考えられ、因果関係の特定には至らず不明であった。

☆動物用医薬品副作用報告（令和7年12月） (2/4)

産業動物における動物用医薬品副作用に関する報告（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第68条の10）

製品名	バイトリル10%注射液	バイトリル10%注射液
製造販売業者名	エランコジャパン株式会社	エランコジャパン株式会社
動物種	牛	牛
発現動物数／投与動物数	2 / 2	1 / 1
性	不明	不明
年齢	不明	不明
投与前の健康状態	不良	不良
以前の使用歴	不明	不明
以前使用時の副作用の有無	不明	不明
投与量	不明	不明
投与方法	静脈内注射	静脈内注射
投与日	R7.10.3	R7.11.3
副作用発現日	R7.10.3	R7.11.3
副作用の種類	転倒、ショック、痙攣、四肢硬直、眼振	転倒、痙攣、発熱、死亡
治療の有無	治療	不明
転帰	回復	死亡
担当獣医師による評価	因果関係がある可能性がある。	因果関係がある可能性がある。
製造販売業者による評価	牛の肺炎に対する本剤の投与経路は皮下注射であり、静脈内注射は効能外使用である。 本剤の使用上の注意において「牛への静脈内注射により、軽度で一過性の落ち着きのなさ及び呼吸リズムの不整がみられることがあり、またまれに循環障害によると思われるショック反応を起こすとの報告があるので、本剤を静脈内投与する場合には、被投与動物の状態を十分に把握しながら慎重に投与すること。」と記載されている。今回、投与量は不明であるが、投与直後にショック様症状を呈したことから因果関係は否定できない。また、非ステロイド性消炎鎮痛剤(NSAIDs)との併用により、まれに痙攣が発現するとの報告がある。本事例ではNSAIDsが併用されたという情報はなく、1次診療で用いられた薬剤も不明である。以上のことから、これ以上の考察は困難であるものの、症状発現のタイミングは本剤投与と一致しており、本剤投与と症状との因果関係はないとはいえない結論した。	本剤の牛の肺炎に対する投与経路は皮下注射であり静脈内注射は効能外使用である。本件は誤嚥性肺炎を発症しており本剤投与前に他の抗菌薬が投与されていた。また、実験動物を用いた既報では、キノロン系薬は容量依存的に痙攣を誘発すると報告されているが、本件では投与量および投与から痙攣がみられるまでの間隔は不明であった。さらに使用上の注意において「牛への静脈内注射により、軽度で一過性の落ち着きのなさ及び呼吸リズムの不整がみられることがあり、またまれに循環障害によると思われるショック反応を起こすとの報告があるので、本剤を静脈内投与する場合には、被投与動物の状態を十分に把握しながら慎重に投与すること。」とあり、投与時の症状が影響した可能性は否めない。死後剖検検査等は実施されておらずこれ以上の考察は困難であり、本剤投与とつい死との因果関係は結論に至らず不明であった。

☆動物用医薬品副作用報告（令和7年12月）

(3/4)

産業動物における動物用医薬品副作用に関する報告（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第68条の10）

製品名	ポーシリス PCV M Hyo	ポーシリス PCV IDAL
製造販売業者名	MSD アニマルヘルス株式会社	MSD アニマルヘルス株式会社
動物種	豚	豚
発現動物数／投与動物数	1 / 30	1 / 30
性	オス	オス
年齢	不明	不明
投与前の健康状態	不明	不明
以前の使用歴	なし	なし
以前使用時の副作用の有無	－	－
投与量	2mL	0.2mL
投与方法	筋肉内注射	皮内注射
投与日	R7.10.8	R7.10.16
副作用発現日	R7.12.5	R7.11.10
副作用の種類	死亡	活動性低下、食欲不振、呼吸異常、体重減少、死亡
治療の有無	無処置	不明
転帰	死亡	死亡
担当獣医師による評価	因果関係がある可能性は低い。	因果関係がある可能性は低い。
製造販売業者による評価	死亡は製品投与後58日後に認められたため、本製品と症状の時間的な関連性は弱い。また、診断や剖検は報告されていない。本製品との関連性を否定できないが、他の病因も除外できない。	死亡は製品投与後33日後(他の症状は25日後)より認められたため、本製品との時間的な関連性は弱い。また、診断や剖検は報告されていない。本製品との関連性を否定できないが、他の病因も除外できないため、因果関係は不明と判断する。

☆動物用医薬品副作用報告（令和7年12月） (4/4)

産業動物における動物用医薬品副作用に関する報告（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第68条の10）

製品名	ポーシリス PCV IDAL	インゲルバック フレックスコンボ ミックス
製造販売業者名	MSD アニマルヘルス株式会社	ペーリンガーインゲルハイムアニマルヘルスジャパン株式会社
動物種	豚	豚
発現動物数／投与動物数	1 / 30	3 / 50
性	オス	混在
年齢	不明	20日
投与前の健康状態	不明	不明
以前の使用歴	なし	なし
以前使用時の副作用の有無	－	－
投与量	0.2mL	2mL
投与方法	皮内注射	筋肉内注射
投与日	R7.10.16	R7.10.27
副作用発現日	R7.11.11	R7.10.27
副作用の種類	活動性低下、食欲不振、体重減少、死亡	発見時死亡
治療の有無	不明	無処置
転帰	死亡	死亡
担当獣医師による評価	因果関係がある可能性は低い。	因果関係は不明。
製造販売業者による評価	死亡は製品投与後33日後(他の症状は26日後)より認められたため、本製品との時間的な関連性は弱い。また、診断や剖検は報告されていない。本製品との関連性を否定できないが、他の病因も除外できないため、因果関係は不明と判断する。	本症例は昼前に本剤を50頭の子豚に投与し、夕方に死亡した3頭を発見したことである。本剤投与後12時間以内に死亡していることからアナフィラキシー反応の可能性も否定できないものの、死亡までの経過の詳細が不明であり剖検等が行われていないことから、本剤との因果関係は不明と考える。

☆家畜衛生レポート（岐阜県より）

岐阜県飛騨家畜保健衛生所

1 はじめに

岐阜県は、日本のはば中央に位置した全国では数少ない内陸県の一つです。当所は、岐阜県の北部に位置し、古い町並みや、動く陽明門と称される屋台（山車）など祭で有名な高山市に所在し、連続テレビ小説や有名アニメ映画の舞台にもなった飛騨市、温泉の街・下呂市、世界遺産・白川村の3市1村を管轄しています。

管内における家畜飼養状況の特徴としては、「飛騨牛」の主産地として県下の半数にあたる約17,000頭の肉用牛が飼養されており、夏山冬里方式による繁殖雌牛の放牧が盛んに行われていることがあげられます。一方で、鶏は県内のわずか1%未満と少ない状況となっています。豚については戸数は僅かですが、省内最大規模を含む大規模農場が複数所在し、頭数は県下の30数%を占めています。

2 飛騨家畜保健衛生所の体制

スタッフは、所長以下獣医師は12名であり、管理調整業務等を行う総務課は農林事務所職員が兼務する体制となっています。当所には省内全家保に共通する防疫係及び保健衛生係のほか、省内で唯一の生産衛生係、また中央家保と並び病性鑑定係を備えた計4つの係で業務を行っています。

また、牛肉輸出に対し適切に対応すべく、「飛騨食肉衛生検査所」が当地域に新設されたことに伴い、平成30年度からは、家保職員と食肉衛生検査職員とが互いに兼務する取り組みが開始され、飛騨家保の職員が定期的にと畜検査にも従事しています。まさに「Farm to Table」を地でいく取り組みであり、生産現場から更にその先まで携わる機会を与えたと認識して、健康な家畜づくりや安全な畜産物の生産・流通の確保に積極的に取り組んでいます。

3 新飛騨家保の新築移転整備

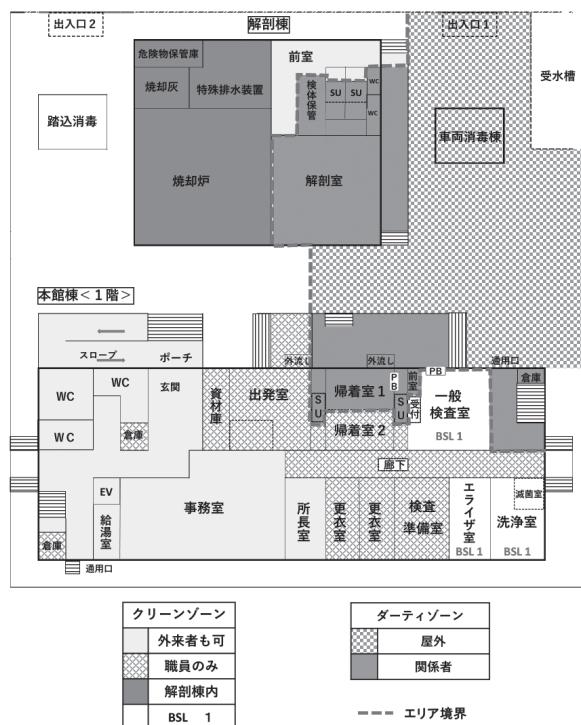
近年、豚熱を始めとする家畜伝染病の発生・蔓延リスクの高まりから地域の防疫拠点である家保の果たすべき役割は大きくなっている一方で、旧飛騨家保は総合庁舎内に入居していたため、バイオセキュ



御岳山を望む公共牧場



新飛騨家保の外観



新飛騨家保の構造図（1階・解剖棟）

リティの確保が困難でした。そこで岐阜県における豚熱発生を機に、中央家保のみで実施してきた病性鑑定を飛騨地域においても可能とし県全体の家畜防疫体制を強化するため、飛騨家保の移転整備が行われました。

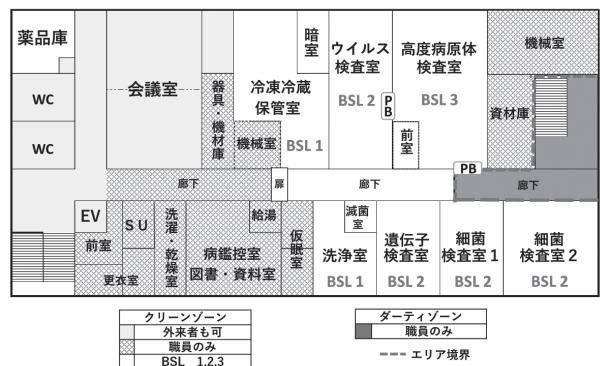
これにより、新たに高度病原体検査室（BSL3室）、解剖・焼却施設、および倉庫・車庫棟が新設されました。施設は高度病性鑑定部門との交差汚染防止に十分配慮したゾーニング計画を実施し、敷地内における人や車両の動線もクリーンゾーンとダーティゾーンに分離しました。施設内を入退出する車両に関しては車両消毒ゲートから入場後、ワンウェイで退場する運用としています。館内においても、各エリアの床を明暗色で色分けし可視化することでゾーンの区分を明確にしました。本館には「出発室」と「帰着室」が設置され、出発時と帰庁時の部屋を分けることにより交差汚染の防止対策を図っています。

出張時はダーティゾーンを経ることなく出発室から農場へ向かい、帰庁後は帰着室1にて資機材を洗浄・消毒後、クリーンゾーンへ運び入れます。使用した靴や長靴は消毒した後、エリア境界に設置した棚に据え置き、クリーン側から回収することとしています。また、帰着室両側にはシャワーユニットを備え、職員は必要に応じてシャワーや着替えを行い、ワンウェイで入室できる動線を整えました。

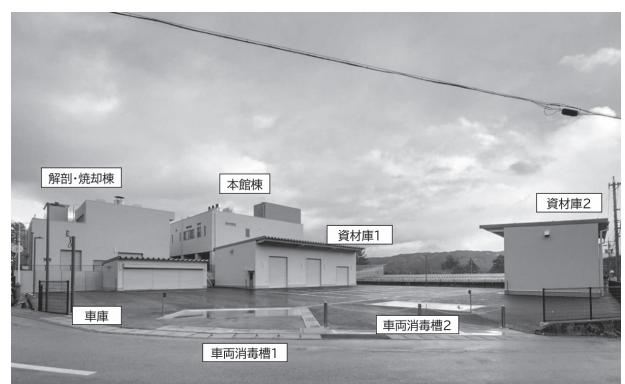
BSL3室を含めた検査関係ユニット諸室は本館棟2階に設置されており、HEPAフィルターを通した吸排気及び陰圧制御によりエリア外への病原体流出を防止しています。有事の際には、高度病原体検査室（BSL3）へ直接検体を搬入できるよう、通用口からの動線を確保しました。

また、敷地内には防疫資機材用倉庫として、防護服等の消耗品を保管するクリーン倉庫（資材庫1）と、動力噴霧器等、再利用する資機材を保管するダーティ倉庫（資材庫2）の2棟を備えています。

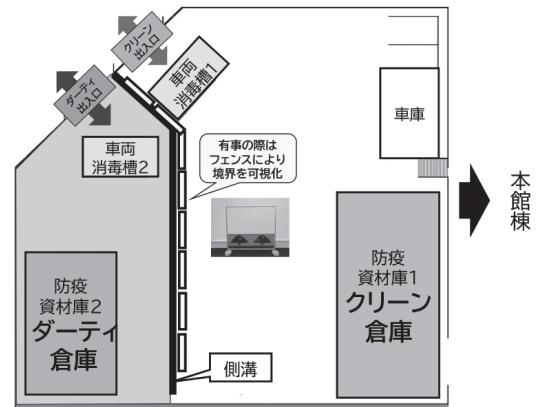
有事の際には、敷地内に設けた側溝に沿って境界フェンスを設置することで、ゾーンごとに可視化された境界を有する完全に独立した動線が確保できます。また、各ゾーンは側溝に向けて傾斜がつけられており、ダーティゾーンからの汚染の流入を防いでいます。



新飛騨家保の構造図（本館棟2階）



倉庫・車庫棟 外観



新飛騨家保の構造図（倉庫・車庫棟）



資材庫1における備蓄品保管状況

倉庫内にはスチール棚を設置し、フォークリフトを用いた管理により多量の備蓄資材を効率的に配置・移動する事が可能。

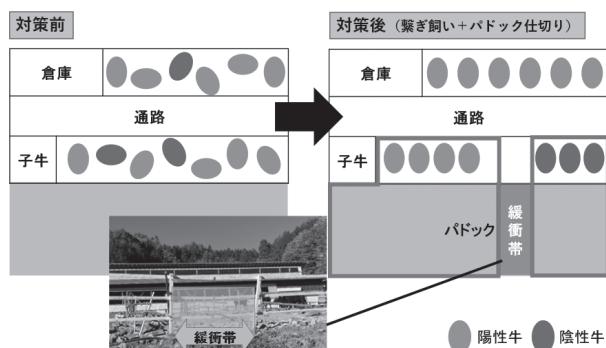
4 牛伝染性リンパ腫の清浄化に向けて

近年、牛伝染性リンパ腫の清浄化に向けた機運が非常に高まっており、これまで地道に行ってきました指導が実を結び、多くの農場が清浄化を達成しています。一方で、対策が思うように進まない農場も多く、地域全体での清浄化にはもう少し時間がかかると思われます。しかしながら、この2,3年においても、管内の肉用繁殖雌牛の陽性率は数%低減しており、状況は一歩一歩、着実に歩みを進めていると実感します。

農場における清浄化対策は状況により様々で、考え得るあらゆる策を講じていますが、農場によっては牛舎に併設するパドックを陽性区と陰性区に分割し、更にその境界には緩衝帯を設けたところもあります。これにより飼育管理上、放牧の必要がある場合にも一定の距離を保てるようになりました。このように、生産者の熱意は高まる一方であり、清浄化への取り組みが益々スピードを増しています。

5 おわりに

平成30年9月に豚熱が岐阜県で発生して以降、現



パドック内の交差対策

在においても散発が続いている。国から示されたロードマップにおける清浄化ステータス取得時期は2050年頃とされており、

まだまだ長く厳しい道のりが続きます。また、高病原性鳥インフルエンザは、毎年多数の発生を見るようになりました。海外悪性伝染病とされていた疾病は次々と身近に迫り、新たな脅威として降りかかってきます。

これからも困難な状況が続きますが、新たな施設を十分活用し、使命感を持って取り組みたいと思います。

最後に、当管内には沢山の観光名所がございます。是非一度、飛騨の地にお越しください。その際は、飛騨家保を覗いていただければ、熱烈歓迎いたします！

通信

2018年9月に日本で26年ぶりとなる豚熱の発生が確認されたのと同時期に野生イノシシの豚熱ウイルス感染も見つかり、以降、捕獲の強化など、環境中のウイルス汚染を継続させ農場への疾病侵入リスクになる野生イノシシの感染制御対策が行われています。2019年3月には輸入外国製品による経口ワクチン散布が始まり、感染地域の拡大に応じて現在では北海道と沖縄県を除く45都府県が経口ワクチン散布対象県となっています。農林水産省では、輸入に頼る野生イノシシ用経口ワクチンの安定供給を図る観点から、国産化に向けた開発支援を行ってきましたが、先日、イノシシ用国産豚熱ワクチンの製造が始まったことについて、製造に関連する国内メーカー3社が発表しました。国産品では、生分解性素材を用いたワクチン液

の袋やイノシシの嗜好性に基づいた誘引香料などの工夫が入れられています。すでに1月下旬に本製品の散布が開始されましたので、今後、国内での製造や供給が安定的に進み、外国製品と併用しながら、効果的な野生イノシシの感染制御に活用されていくことを期待しています。

毎週月曜日発行

家畜衛生週報

編集・発行: 農林水産省消費・安全局
畜水産安全管理課、動物衛生課
☎ 03(3502)8111 内線 4581
〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1